

豊臣秀吉追悼の祭礼を描いた屏風（豊国祭礼図屏風）

重要文化財に指定されているこの六曲一双の屏風には、1604年8月に豊臣秀吉（1537-1598）の死後7年の命日を記念する祭礼で起きた特別な出来事が描かれている。秀吉の息子であり後継者でもある秀頼（1593-1615）により計画されたこの式典は、徳川家康（1543-1616）などの有力な武将によって支援され、宮廷の貴族や何千人もの町民が参列した。

右側の屏風の中央上部には阿弥陀ヶ峯の中腹にある荘厳な本殿群が描かれている。これらの壮大な建物は現存していないが、右下の方には三十三間堂が描かれているのがわかる。豊臣家の人々や大名、貴族たちが神社の正門の前で能の公演を見ている。武将たちが提供した馬に乗った神官たちの行列が前景に描かれている。

左側の屏風には祭礼の2日目の様子が描かれている。豪華な衣装に身を包んだ町民が、方広寺の大仏殿の前で輪になって踊る姿が見られる。中には異国的な南蛮人（当時の西洋人の呼び名）の格好をしていたり、七福神の一人に見立てた服を着ている人もいる。しかし、奇想天外な衣装を着ている人の中でも最も面白いのは、巨大なタケノコに扮している男だろう。

有名な画家の狩野内膳（1570-1616）が2年以上かけてこの屏風絵を制作し、1606年に完成させた。屏風に描かれた千人近くの人々は、細部にまで注意が行き渡った巧みな筆使いで描かれている。高精彩デジタル複製が2004年に神社に寄贈された。岩佐又兵衛（1578-1650）が描いたとされるこの屏風の別バージョンは徳川美術館が所有している。